

《実践報告》

やり取りから debating そして essay writing へ

岡崎 伸一 (現代教育研究所研究員 熊本大学 教育学部 前目黒区立東山中学校)

1. はじめに

筆者は2021年1月13日に目黒区教育会英語研究部研修会にてビデオによる公開授業を行った。担当は中学3年生であった。テーマは題名にあるように、spoken interactionのやり取りの指導を基本とし、debatingへ移行し、そしてessay writingへとつなげていくことを目標としていた。本来は中学1年生の簡単な一文ずつのやり取りから始まり、徐々に二文、三文とやり取りの回数が多くなるように指導していた。しかし、学校を異動し、担当したのは中学3年生であった。聞くところによると一年毎に主担当の英語科教員が替わっていたが、逆に毎年英語科教員が交代することに慣れており、柔軟性があるのではないかとも感じた。

中学1、2年生での指導の積み重ねがなかったのだが、中学3年生であっても基本は音声中心のやり取りから指導し始める。そして、やり取りすることに慣れてきたら、教科書内容の復習を兼ねてdebatingに発展させていく。そこでdebatingをした内容をessay writingに落とし込む流れである。中学生の段階においてessay writingでは、一つの型を示すことで書く形式的なことに囚われることなく、内容に重きを置くことができると考えた。

東京都の公立高等学校での共通一般入試では、essay writingまでの語数や文の数を求められることはない。通常は3文の英語で表現する問題が出題されている。しかし、高等学校への接続を意識して指導をするのであれば、多くの生徒が50～80語程度でessay writingができるようになってから卒業させたいと考えていた。前年度から感染症対策にて授業の中でも、面と向かったやり取りは制限され、ソーシャルディスタンスをとることにもなったが、そのような環境下であっても実践してきたことを記していく。

2. やり取りでの指導

やり取りとは、「聞く」「話す」を統合した力である。この力を育成するにあたり、「ダイアログ(会話の基本型)を状況設定で意味を分からせ、真似させ変化のある繰り返しでプラクティスをさせ、実際の会話の状況に近い形でアクティビティを用意してプラクティスをさせ、その日のダイアログを言えるようにする。」(向山, 2007, p106)手法で指導していった。

教科書での指導の前にこのダイアログ指導を行うのである。すなわち、文字での指導の前に音声面での指導になる。このダイアログ指導を新出文法事項として扱い、その後に教科書指導(本文理解)をする。

(1) 指導方法の中学1年生の例

先述したダイアログ指導は三段構成法にて行う。以下の①～③の流れとなる。ここではQ) Do you have any pets? - Yes, I do. Q) What pet do you have? - I have a ... を一例にする。Do you have any ... s? の疑問・応答文は既習であり、What ... do you ...? の導入場面である。

①状況設定を与える

アニメキャラクターを使うことで生徒の背景知識を活用する。口頭で教師がターゲットとなるダイアログのQ&Aを一人二役で導入する。たとえば、「Hello, Katsuo! Do you have any pets? – Yes, I do.” (図1)

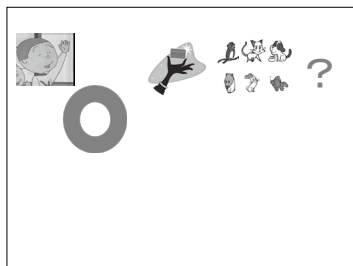


図1

“What pet do you have? – I have a

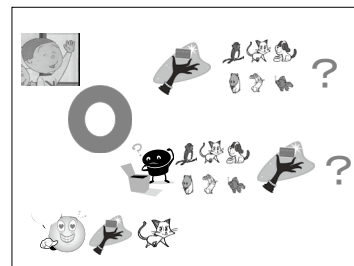


図2

cat.” (図2)」。サザエさんのキャラクターであるカツオくんを使うことで、猫を飼っている背景知識が活性化される。画面では左にカツオがいるので、著者は画面の右に立ち、画面のカツオと会話をしているように導入する。ここでは、他のキャラクターも使用し導入をした。

②練習をする (右表1 ①~⑥)

ここでは、2文+2文の4文構成に増えていくため、最初の2文から復習としても練習をする。教師がDo you have any pets?と尋ね、生徒にはYes, I do. / No, I don't.と応答させる。列指名し、言えるか確認をする。その後ペアで言えるのかを確認させる。後半の2文も同様に、What pet do you have?と尋ね、生徒にはI have a ... / I don't have any pets.と応答させる。初めの質問の応答でNo, I don't.となることもある。その次の質問は、What pet do you want? となる。応答文から練習させる理由は、疑問文よりも応答文の方が生徒は言い易いからである。

その後、疑問文を練習し、全体や個で言えるのかを確認する。そして、ペアでQ&Aの形でダイアログ練習をさせる。

③アクティビティで練習をする

練習してきたことを言えるのかを実際の会話をする設定で練習をさせる段階である。筆者の場合は、クラス内でペア組がA、B、Cと3種類あるので、練習した相手とは違うペアでやらせるようにしていた。

④ダイアログをつなぐ

2文や4文だけでは、会話は続かない。図3のように画面を提示し、どのように2文ダイアログが4文ダイアログになっていくのかを教えながら練習をして

表1 ダイアログ練習の手順例

① (一人二役で口頭導入)	Hello, Katsuo! Do you have any pets? — Yes, I do. What pet do you have? — I have a cat.
② (応答文の練習)	Yes, I do. / No, I don't.
③ (教師が質問をし、生徒が応答する)	T: Do you have any pets ? S1: Yes, I do. / No, I don't. T: Do you have any pets ? S2: Yes, I do. / No, I don't.
④ (質問文の練習)	T: Repeat, do you have? Ss: Do you have? T: any pets? Ss: any pets? T: Do you have any pets? Ss: Do you have any pets? T: (小さな声で) Do you have any pets? Ss: Do you have any pets? T: (大きな声で) Do you have any pets? Ss: Do you have any pets? T: Stand up! Practice three times and then sit down. Ready go!
⑤ (質問文の確認) 列指名をし、生徒が質問して教師が答える。	
⑥ ペアで簡単にやり取りができるのかを確認させる。	

やり取りから debating そして essay writing へ

やり取りの型を示しているため、練習は単調になり易い。そこで、次のように少し発展させたやり取りにしていく。教師が初めに “Which do you want to go to, eastern Japan or western Japan?” と投げかけ、生徒は “I want to go to eastern [western] Japan.” と答える。理由を付加しなければ、“Why?” と理由を尋ねる。生徒は “Because eastern Japan is more interesting than western Japan.” などと回答する（この段階であれば、ほとんどの生徒は理由を付ける）。“What can you do there?” と追加質問をする。生徒が言いよどむようであれば、“We can eat delicious food in Hokkaido.” のように例示する。このように生徒が答えられたならば、Give me an example. と促すことで、生徒は “For example, it’s ramen.” のように答えていく。

このようなやり取りのパターンを繰り返すと、生徒が答えていた文をつなげることで、Opinion（意見）、Reason（理由）、Example（例示）をセットで言えるようになる。

(3) 判定の指導

Debating であるために、判定をすることになる。しかも、参加している生徒が同じ基準で公平に判定できなければいけない。上述の(1)と(2)のように口頭導入してきた文章を活用し、判定するやり取りもアイコン化したものを提示する。表2と表3は提示した内容を書き出したものである。

表2 Debatingでの判定（右側が勝ちの例）

I want to go to eastern Japan because eastern Japan is more interesting than western Japan. We can eat delicious food in Hokkaido. For example, it’s ramen.	I don’t agree with you. Because we can eat delicious food in Okinawa. For example, it’s soki-soba. I want to go to western Japan. Because western Japan is more interesting than eastern Japan. We can see beautiful castles in Osaka. For example, it’s Osaka Castle.
I don’t agree with you. Because we can buy new things in Tokyo. For example, they are new CDs.	

表3 Debatingでの判定（引き分けの例）

I want to go to eastern Japan. Eastern Japan is more interesting than western Japan. Because we can see Chusonji-konjikido in Iwate. Are there other interesting Prefectures in western Japan?	Yes, there are. For example, it’s Kyoto. We can see Kinkakuji Temple in Kyoto. So, I want to go to western Japan.
We can see exciting annual events in Kyoto. For example, it’s Gozanno okuribi. Are there other exciting prefectures in eastern Japan?	Yes, there are. For example, it’s Akita. We can see Namahage in Akita.

表2は右側の主張に対して、左側の最後の“Because we can buy new things in Tokyo.”の反論が正対していないからである。易しい単語、表現ではあるのだが、この例示により「正対して反論する」ことを学んでいく。帰国生で英語が日常語であっても、言いたいことが先行してしまい、正対していない事例も見られた。

(4) ビデオによる研究授業にて

本来の研究授業となると、教室での参観になる。しかし、前年度からの感染症対策によりビデオによる研究授業での実施になった。また、感染症対策のために通常の授業にも制限がかかっていた。たとえば、英語の授業での英語の歌を歌うことや対面でのやり取りの自粛であった。教室内でのやり取りをさせる時には苦肉の策として、対面せずに黒板の方にお互いが向いながらやり取りをさせていた。

この研究授業では、その後にessay writingがあることから、紙媒体で「書くことでのやり取り」を試みた。研究授業では「紙上debating」とした（この授業の指導案は表4を参照のこと）。

表4 ビデオにおける研究授業の指導案（本時の部分のみ）

9 本時（全8時間中の第4時間目）			
(1) 本時の目標			
①紙上でdebatingをする。			
②Opinion, Reason, Example, Opinion (OREO)を活用し、自分の意見等を述べる。			
(2) 本時の展開			
時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準
導入 (1分)	○ Greetings 挨拶をする。	アイコンタクトをしながら挨拶をする。	
帯活動 (4分)	● Vocabulary Building ・キクタンDAY10 Check4 ①日本語で言われたことを英語にする。 ②ペアの役割を逆にして上記の①をおこなう。	記憶のフックにかけるようなエピソードなどを伝える。	生かすようにする。記録に残す評価は行わず、ねらいに即して生徒の活動の状況によりモニタリングする。良い表現等はフィードバックとして
展開 (30分)	● Review Work ・ Debating の判定の2パターンを復習する。 ①2つの判定例を提示される。 ②勝者をどちらかを答える。 ・ Debating を教師対生徒でおこなう。	復習のためテンポ良く行う。	
	● 1st Debating ①論題に対して、指定された立場となる。 ②ペアで5分間の紙上debatingをする。	まずは活動をさせる。	
	● Sharing Time ・ 表現できなかったことや相手の良かった表現をシェアする。 ・ OREOのTipsを提示する。	生徒から引き出す。 明示的に指導する。	
	● 2nd Debating ①先ほどの逆の立場が指定される。 ②紙を裏面にして、ペアで7～8分間の紙上debatingをする。	止まっている生徒がいれば、個別指導に入る。	
まとめ (5分)	● Closing ①振り返りシートの記入し、目標の達成度を確認する。 ②クラスで振り返りをシェアする。 ③ハンドアウトを回収する。 ④挨拶をする。	今日の学びを振り返らせる。	

側面」(図8)として評価ができると分析された。この授業での活動から生徒が粘り強く取り組んだ変容が見て取れる。この部分を評価することが翌年度から気をつけていくべき箇所となる。

もう一方の「学習を調整しようとする側面」して評価できる部分は、図9内の太字である。これらの生徒の言葉に見られる変容から学習を調整しようとする側面から評価ができると中学校教員に示してくださった。

小学校ではすでにこの年から学習指導要領が改訂され、新観点での評価が始まっている。その視点から中学校現場への助言はとても参考になるものであった。主体的に学習に取り組む態度の観点にとっても不安を持つ中学校教員が多くいたため、具体例を挙げつつ、提示されることによって、翌年度からの心構えができたであろうと感じている。

・表面をやったときは、I don't agree with you. の表現しか使えなかったが、裏面では、Please explain about it. という表現を先生が言っていたので、活用することができた。

・自分が言いたい意見を英語で表現しようとした時に、**学習を調整しようとする側面**にした。

・僕はあまり単語を書けないので、先生が例として言っていたことを自分のことに当てはめて書いた。1回目は、賛成・反対を言わずに質問をしていたが、2回目は、相手の意見に対して、どう思っているのかを書いた。教科書に書いてある単語を多く使用した。

図9 学習を調整しようとする側面

③ディベートの論題について

今回の論題は、“Which do you want to go to, eastern Japan or western Japan?”であったが、他の教科書での論題を例示された。たとえば、“City life or country life?”という論題であれば、答える時には“City life is better than country life.”となり、討論に相応しくなると助言があった。その視点から論題を作るとなると“Which is better, eastern Japan or western Japan?”の方が適切だろうか。

4. Essay Writingの指導

生徒は、討論をしていく中で他人の意見等を聞いたり、やり取りをしたりすることで、論題に対して思考をしていくことになる。次のessay writingにつなげるには、生徒にどのような構成が良いのかから考えさせ、学ぶ機会を作るのも良い。しかし、この時期は教師からの例を示し、書くことでも型にはめることになるが、真似をする「英借文」をすることで、書く時間やペアなどで書いたものを読み合う時間を取ることを優先した。

(1) 例を示して書く型を知る

教師は一言言い、文を投影することを繰り返す(図10)。赤字で投影にしたthree reasonsやFirst、Second、Lastは書く上での鍵となり、緑字で投影したwe can eat [see, buy]は理由を挙げるための動詞となり、青字で投影したFor exampleは例示するためである。

③ Listen & Read.

I have three reasons why I want to go to Western Japan.

First, we can eat delicious food in Osaka. For example, it is okonomiyaki.

Second, we can see the World Heritage Site in Hiroshima. For example, it is the Atomic Bomb Dome.

Last, we can buy delicious sweets in Okinawa. For example, it is Beniimo Tart.

図10 文章例の例示

(2) 思考をする

図11～14のように教室全体に質問を投げかけ、生徒は答えるように自分の考えをまとめていく。

やり取りの延長線上に書くことを設定する。初めの質問と答は強引な感じではあるが、「1つか2つしか思い浮かばない」という生徒から声は挙がることもあるが、あくまでも例示であるので、思考することを第一とする場だからである。後でそのように考えて書けば良いのかと気がつくことになる。良い意見があれば、それを拾い挙げてクラス全体でシェアをすると考えが定まらない生徒のヒントになり得る。Slow learnersにはとても大切なことである。

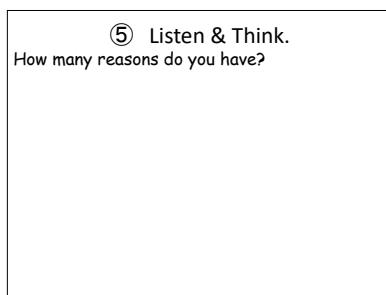


図11 1つめの質問の提示

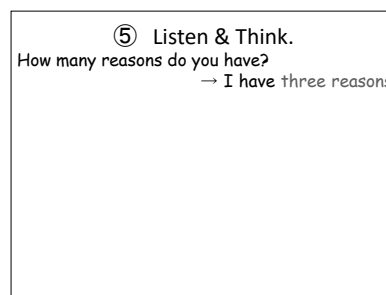


図12 1つめの答の提示

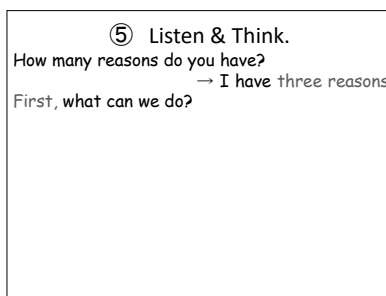


図13 2つめの質問の提示

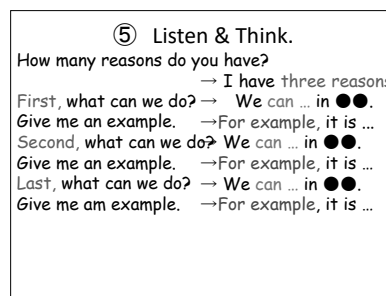


図14 全ての質問と答の提示

(3) Essay Writingの構成を知る

初めに、Openingパラグラフを型として提示する(図15)。これまでの練習を経てくると何をどう書けば良いのかが理解され、書くことも早くなる。全体を書くように指示してから、個別に支援した方が良さそうな生徒の所に行く。

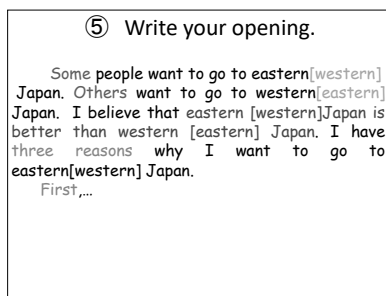


図15 Openingパラグラフの提示

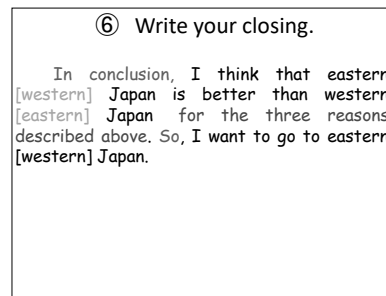


図16 Closingパラグラフの提示

次にClosingのパラグラフの提示(図16)をし、書く時間をとる。

(4) Essay Writingを仕上げる

次の授業でessay writingの仕上げを予告し、他に理由等を調べて来ることをも促す。復習も兼ね同じ論題でクラスを2つに分けて討論をしてから、罫線入りの紙を渡し、5パラグラフで書かせる。その後、書き終えた後にはペアやグループで交換し、読み合わせをさせる。そのことで、書くことには、読み手の意識が必要であることを感じるのである。

5. おわりに

ここまで「やり取りからdebatingそしてessay writingへ」を意識した実践を報告する形で述べてきたが、さらに詳細が必要な場面もあったであろう。しかし、debatingへのハードルを感じている先生方に少しでも参考になれば幸いである。「うちの生徒には難しい」や「まだディベートをやるには早

い」とは思わずに、初めの一步を踏み出すことが大事であると考えている。かつての自分はそうであった。私の実践の中では研究会等での仲間の実践を同じようにした追試も多い。目の前の生徒の力をつけさせるためにも仲間との情報や指導法を共有することもできれば、教師人生も豊かになるのではないかと考えている。どこか違う形で今回のテーマを掘り下げていきたいと思う。

参考・引用文献

- 岡崎伸一（2014）『「聞くこと」と「話すこと」を同時に、やりとりで指導する』関東甲信地区中学校英語教育研究協議会第38回栃木大会第一分科会資料
- 加藤心（2015）『教室に魔法をかける!英語ディベートの指導法』学芸みらい社
- 瀧沢広人（1997）『英語ライティング活動メニュー集—すぐ使えるファックスシート集』明治図書
- 向山浩子（2006）『子どもが話せる TOSS 型英会話指導』東京教育技術研究所
- 向山浩子（2007）『TOSS 英会話指導はなぜ伝統的英語教育から離れたか』東京教育技術研究所
- 野網佐恵美（2014）『ダイヤモンド・ダイアログ資料集』NPO 法人子ども夢つむぐ